

ダンスセラピーにおける テンション・フローの調律

お茶の水女子大学 大橋さつき

1. はじめに

ダンスセラピーにおいては、セラピストと患者（または、参加者）の身体を通して生まれる動きの共振・共鳴・同調といった体験が「共感」を生み、治療効果を促進するとして重要視されている。しかしながら、どのような現象が生じたときに身体的共感が得られたと考えるべきかという点について共通のものさしが存在しない。

動きを観察・分析・理解するためのシステムであるKestenberg Movement Profile (= KMP) においては、「共感とは、テンション・フロー (tension-flow) に現れる他者の欲求や感情に対する調律 (attunement) である。」と定義されている。本研究においては、文献調査を中心に、① KMP 因子の一つとされるテンション・フロー (tension-flow) 、および、②調律 (attunement) という概念を整理することにより、この定義自体の解釈を試みた。

2. 結果及び考察

2-①. KMPにおけるテンション・フロー

KMPは、アメリカの精神分析家Judith S. Kestenbergらによって、Labanの理論と精神分析学派の論を軸に開発されたシステムである。KMPは、ダンスセラピーにおいて、動きの観察・記録・査定・介入の各段階で、動きの質に関する共通言語として用いられ、情動の発達段階を把握するのに役立つとされている。

KMPは2つのシステムから構成されている。中でも、システムIは内的な欲求や感情を反映するとされ、その基本となるのがテンション・フローである。テンション・フローは筋肉の緊張度の変容であり、フリーとバウンドの両極が存在する。テンション・フローは、Freudの論に照らし合わせて10種類の代表的なリズムに分類されている。

2-②. 調律 (attunement)

KMPにおける調律という用語は、乳幼児精神医学の分野において、Sternらによって定義された「情動調律」の概念より引用されていることが明らかになった。青木 (1999) は、「情動調律とは、通常我々が互いの情緒状態を共有しあう時に起こる現象の一つで、非言語的に成立可能な相互交流としてとらえられている。」と説明している。

Stern (1985) は、調律という用語の概念化にあたり、特に「模倣」との区別について、実際に

は完全に二分できるものではないとしながらも、文字通りの模倣ではないと説明する。調律の特徴を模倣との比較によってまとめると、調律には、相手の発した行動に何らかのマッチングが見られるが、それは完全な模倣ではなく、別の表現様形をとること、かつ、マッチさせるのは、相手の行動自体に対してではなく、むしろ、その人の感情状態を反映するような行動の側面に対してであることが挙げられる。

3. まとめ

ダンスセラピーにおいて、セラピストが、患者の動きから感情状態と相関するテンション・フローの変化を読み取った上で、そのテンション・フローに対して形態の模倣ではない調律を行い、かつ、患者が、セラピストの反応が患者自身のテンション・フローに調律したものであることを受け取ることができたとき、そこに初めて、共感が生まれる。ダンスセラピストに求められる共感能力とは、まず、患者の様々な行動から情動調律に必要な動きの質を抽出できることであり、その上で、抽出した動きの質のみを再現し、自らの身体活動をもって患者に伝えることができることであると考えられる。

〈主要参考引用文献〉

- ①青木紀久代 (1999) 『調律行動から見た母子の情緒的交流と乳幼児の人格形成』風間書房／② Loman, S. (1994) Attuning to the fetus and young child: Approaches from Dance / Movement Therapy. *ZERO TO THERE Bulletin of National Center for Clinical Infant Programs Vol.15, No.1 August / September.* ／③大橋さつき (1999) 「ダンスセラピーにおける動作分析法の適用性」お茶の水女子大学人文科学紀要第53巻／④Stern, D. N. (1985) *The Interpersonal World of the Infant.* New York: Basic Books／⑤達さつき (1998) 「ダンスセラピーにおけるKestenberg Movement Profile研究」平成9年度お茶の水女子大学修士論文